



2019 7月 園だより

認定こども園 下関短期大学付属第二幼稚園
山口県下関市彦島塩浜町2丁目2-21 ☎ 083(266)5821

這えば立て、立てば歩めの親心



先日学校関係者評価委員会を開催しました。今年度評価委員をお願いした方は、河野学園の評議員をされている大田啓子さん、元第二幼稚園の園長の堀野留美子さん、現PTA会長の西嶋緩子さんの3名です。

会では、昨年度の学校評価について、また、今年度の教育・保育方針とチャレンジ目標について私が説明をし、理解をしていただきました。その後、委員さんから多くの貴重なご教示をいただきました。特に、昨年度の保護者からの質問、「就学前に読み書き計算等の勉強をさせることについて」に対して、委員さんから様々なご意見をいただきましたのでお伝えします。

どの委員さんも「読み書き計算を教える必要はない。その前に遊びや手伝いを通してたくさんのご意見をいただくことが大事」というご意見でした。

一見遊んでいるだけに見えて、大人にはその面白さが理解できないことがあるような活動ですら、経験の浅い幼児にとってはすべてが学びになっています。好奇心が旺盛で、すべての事象に興味をもち始めているこの時期に、遊びを通して、目を輝かせながら物事に集中する時間を保障してやるのが大事です、と皆さん言っておられました。遊びや製作に夢中になる子は、自然と集中力が養われ、小学校以降の勉強に必ず生きてくるというご意見もありました。学びは、机について行うものがすべてではありません。小学校から身に付けていく知識や技能が、幼児期に経験した様々な遊びに裏付けられ、理解や習得が容易になると同時に、勉強が好きになっていくそうです。

委員さんの一人が、3人の息子を現役で東大に入学させられた保護者の子育てを例にされました。その保護者、後藤眞智子さん（静岡県）はこのような子育てをされたそうです。

- 1 食事中に絶対テレビをつけず、親子の会話を楽しむ。
- 2 子どもに教える前に、考えさせる。
- 3 本当にいやなことはさせない、よその子どもと比べない。

「這えば立て、立てば歩めの親心」は今も昔も変わりません。子どもの成長を願わない親などいません。同年齢の子どもが気になり始めるのもよく分かります。

戦後、近江学園、びわこ学園など多くの施設をつくり、日本の障害児教育のパイオニアと言われている糸賀一雄氏の著書「この子らを世の光に」に次のようなメッセージがあります。

どんな子どもでも、その発達の段階が充実されなければならない。（発達年齢が）1才は1才として、2才は2才として、その発達段階はそれぞれの意味をもっているのであって、その時でなければ味わうことのできない独特の力がその中にこもっているのである。1才は2才でないからといって低い価値なのではない。それぞれの段階がもつ無限の可能性を信じ、それを豊かに充実させること以外に人間の生き方というものがあるだろうか。

ハイハイができ始めた子は、自分の意思で目的場所に移動できることが分かり、興味が大幅に拡大します。立ッタができ始めた子は、視点が高くなることによって、三次元の世界を発見、理解し、楽しめます。子どもは、それぞれの発達段階で、存分にその世界を謳歌しようとしているのです。大人には見えなくても毎日急成長している時期です。無理矢理大人の世界に引っ張り込むのはやめ、どうぞ一緒に子どもの現在の世界に入ってみられてください。（園長 寺本 明生）